
Role Playing Girl!!

なべしき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R o l e P l a y i n g G i r l ! !

【Nコード】

N 2 2 2 5 Z

【作者名】

なべしき

【あらすじ】

「押入れを開けたら、ウバメの森でした」—— 迷い込んだ世界は、人間とモンスターが一緒に暮らす世界。

草むらから飛び出してきた巨大な芋虫に涙目になったりつつコガネのゲームコーナーでバイトして、ようやく慣れてきたと思ったのに…… 生まれて初めてゲットしたポケモンが極度の方向音痴！？ ケーシイのテレポートでジョウト各地を不本意に冒険する、ポケモンを知らない主人公の異世界トリップ。

はたして彼女はバイト先…… いや、元の世界に帰れるのか！？

以前サイトに載せていたネタの再掲載です

ウバメのもり

遊びにきた親戚の男の子（たっくん。5才）の子守りをする事になった。

おねえちゃんかくれんぼしようとせがまれたのでとりあえず押し入れの中に隠れたが、いくら待てども鬼のたっくんは捜しに来なかった。

痺れを切らせて押し入れの戸を開けて、絶句した。

森だ。

何故かわたしは鬱蒼と木々の生い茂る森の中にいた。いや、正確には森の中にある小さな古びた祠の中で体育座りしたまま固まっていた。

罰当たりなのでとりあえず祠から出て森を歩いてみることにした。

が、五分もしないうちに後悔した。

森には見たこともないような巨大な芋虫や巨大な蛾のような生き物がうじゃうじゃいたのだ。草むらから緑色の芋虫やら蛹やらが飛び出してくるたびに情けない悲鳴をあげる。

すっかり涙目になっていたところに、大きな麦わら帽子をかぶって虫取り網を持った少年が現れた。救世主の登場である。少年はわたしにスプレーのようなものをかけると、森の出口まで案内してくれた。

「キヤタピーにビビって泣くなんて姉ちゃんだっせー！」

少年はわたしの話を聞いて笑っていたがわたしにしてみたら全然笑いごとじゃない。あんな巨大な芋虫、常識的に考えてあり得ない。ビクビクしながら少年の道案内に従うが、不思議なことに、少年と

一緒に歩いているとキャタピーという名前らしい巨大な芋虫も、トランセルというらしい蛹も飛び出してこなかった。少年曰わくさつきわたしにかけてくれた『むしよけスプレー』のおかげらしい。

「姉ちゃん、むしよけスプレーも知らないの？」

むしよけスプレーどころか、ここがどこかも知らない。

34 ばんどろ

森の出口で少年にお礼を言って別れた。森を抜けると開けた道に出た。ハイキングでもできそうなくらい緑豊かで、ボーイスカウトのような格好をした子どもたちの姿もあった。光があまり届かない薄暗い森の中からは分からなかったが、外はとてもいい天気だった。ここはどこなのだろう。

民家の前に優しそうなおじいさんが立っていたので道を尋ねると、わざわざ家の中に戻って地図を持ってきてくれた。

これで自分のいる場所がわかると喜んだが、すぐにその希望は消えた。地図に記されている地形も地名もわたしの記憶にあるものとは大きく異なっていたのだ。タウンマップを握りしめて呆然としてみると、おじいさんが申し訳なさそうに言った。

「すまんが、カントー地方のタウンマップは持ってなくてのお……」

関東地方？聞き覚えのある単語にわたしの胸に希望が生まれた。真っ暗だった目の前が明るい光で照らされたような感覚。今いるところはジョウト地方というらしい。ほかにホウエン地方という場所があるらしいが、どちらも聞いたことがない。やはりカントー地方そこに行けば家に帰れるかもしれない。

おじいさんに礼を言ってタウンマップを返そうとすると、いつかまたここに寄った時に返してくれればいいと言ってタウンマップを貸してくれた。有り難くお借りすることにした。

「行くあてがないなら、とりあえずコガネの街に行ったらどうかの？あそこはジョウト一番の都会じゃし、何か手がかりも見つかるかもしれない」

おじいさんの指差す先に、遠く、高層ビルと電波塔がそびえ立って
いるのがかすかに見えた。

コガネシティ

景品交換所の鍵を開けて、棚にいらんだモンスターボールに挨拶をするのがわたしの毎朝の日課である。

「おはよう。ケーシィ」

ケーシィという名前のそのポケモンは小さく頷いたように見えた。

わたしがここ、コガネシティにやって来て一カ月ほどたった。コガネに着いたわたしはまず、当面の生活費を稼ぐために仕事を探した。コガネシティは大会である。幸いなことに仕事はすぐに見つかった。ゲームコーナーでコインと景品を交換する係員のバイトだ。右も左もわからない世界での生活はあつという間に過ぎていった。まさに光陰矢の如し。

家に帰る手がかりは見つからなかったが、働きながらわかったことがひとつだけある。

この世界はどうやらわたしの元いた世界とは違う世界かもしれない——ということだ。

その事実をわたしにまざまざと知らしめたのは、『ポケットモンスター』…縮めて『ポケモン』という存在だった。

この世界に住んでいる人たちは当たり前のようにポケモンと呼ばれる生き物と一緒に暮らしている。

ポケモンは世界に数百もの種類が存在し、人々はそのポケモンをペットのように可愛がったり、仕事のパートナーとして一緒に働いたりしている。ポケモン同士を闘わせる競技のようなものも存在するらしい。人々はポケモンを『モンスターボール』というカプセルに入れて持ち歩く。その手軽さのためか、ポケモンは子どもからお年

寄りまで老若男女さまざまな世代の人たちに親しまれている。

わたしはポケモンなんて知らない。

わたしの世界にそんな生き物いなかった。よってこの世界はわたしの住んでいた世界とはまったく別次元の世界だという認識をせざるを得なかった。

と、いうことはつまり『カントー地方』もわたしの知っている『関東地方』とはまったくの別物である可能性が高い。しかしわたしは希望を捨てなかった。そんなの実際に行ってみないとわからないじゃないか。とりあえず今はゲームコーナーのバイトを続けてカントーに行くお金を貯めようと思う。行ってみて、やっぱり違ったら、そのときはそのときで、またそこから考えればいいや。

そんなふうに気楽に考えられるくらいわたしはこの世界の生活に慣れてきていた。そしてやっぱりそれにはポケモンの存在が大きく影響していた。

いつの間にかわたしは、この世界の人たちと同じようにポケモンに親しみを感じていたのだ。

ゲームコーナー

「おはよう、ケーシィ。今日こそ誰かにもらってもらえるといいね」
今日も毎朝の日課でわたしの一日が始まる。

景品交換所はコガネの街の繁華街、カラフルなネオン輝くゲームコーナーの中に併設されている。

ゲームコーナーにはスロットがあり、お客さんはそのスロットで稼いだコインをこの景品交換所で目当ての景品と交換するのだ。まあ、わたしの世界でいうパチンコみたいなものだと思う。だが、あくまでゲームなので小さな子どもでも遊べるところがパチンコとは違う。『安心・健全・街のみんなの遊び場』というキャッチコピーで街一番の娯楽施設になっている。

景品はグッズやポケモンバトル用のアイテムなど、ほとんどがポケモン関連のものである。そしてなんと、ポケモン自体も景品として棚に並べられているのだ。はじめて見たときはとても驚いた。生き物を景品にして大丈夫なのだろうか。愛護団体的な組織が反対運動に押しかけてきたりしたらどうしようと不安だったが結局は杞憂だった。それどころか景品のポケモンにはとても珍しくなかなか手に入らない種類がいるらしく、そのポケモンが目当てのお客さんはみんな血眼になってコインを集めていた。珍しいだけに必要なコインはちょっとやそつとの枚数ではない。この一カ月だけでいったい何人のポケモントレーナーがコインが足りずに泣く泣くスロットの台にとんぼ返りしていったか。両手両足の指では数え切れないだろう。そんなふうに誰もが欲しがる大人気のポケモンもいれば、なかなかもらい手が現れないポケモンもいる。

それがわたし毎朝ボール越しに話しかけているケーシィだ。
店長曰わく、育てば強いポケモンになるらしいが、はじめのうちは技（ポケモンは技を覚えて攻撃したり自分の身を守ったりする）を一つしか覚えられないので育てるのが難しく、なかなか欲しがる人がいないのだそう。そんなわけで他の景品のポケモンたちが次々にもらわれていくなか、いつもケーシィだけはひとりぼっちで取り残されていた。そんなひとりぼっちの境遇がなんだか自分の置かれていた状況とダブリ、わたしは毎朝ケーシィに話しかけるようになったのだった。ボール越しのコミュニケーションだったが、いつも眠そうに身体を丸めているケーシィもだんだん反応を返してくれるようになった。気づけばわたしはケーシィを可愛いと思うようになっていた。

しかし、別れは突然やってきた。

コインケースをパンパンにしたトレーナーがポケモングッズを交換した残りのコインとケーシィを交換していったのだ。寂しかったが、可愛がってくれるトレーナーと一緒にいることがケーシィの幸せなんだと自分に言い聞かせ、笑顔で送り出した。
ところが、予想外の出来事が起こった。

「あの、さっきコインとケーシィを交換してもらった者なんですけど…」

なんと、さっきのトレーナーが一時間もしないうちに戻ってきて、やっぱりケーシィを返すと言ってきたのだ。
どうしたらいいか分からず対応に困っていると、トレーナーは「コインもいりません！」と言ってケーシィ入りのモンスターボールを置いて逃げるように帰ってしまった。

店長を呼んで事情を話すと、店長はモンスターボールの中のケーシィ

イを眺めながら、やれやれと溜め息を吐いた。

「もしかしたらこのケーシイは目当ての特性と性格じゃなかったのかもしれないなあ…」

「特性…？性格…？」

首を傾げていると、店長が察したように説明してくれた。

「そういえば君はポケモンを持っていないんだっただね。ポケモンには特性と性格というものがあるんだよ。同じ種類のポケモンでもそれぞれ持つて産まれた特性も性格も違う。言ってみれば個性みたいなものだね。バトルに有利に働く特性もあれば、逆に不利になってしまう特性もある。攻撃力が上がりやすい性格もあれば、防御力が上がりやすい性格もあるみたいな感じにいろいろなんだ」

「なるほど…」

「だから困ったことに、たまーにいるんだよね。野生のポケモンを捕まえても欲しかった特性じゃなかったからすぐに逃がす無責任なトレーナーがさ」

「それじゃあ、このケーシイも…？」

「うーん…もしかしたらそうなのかもなあ…」

「そんな…」

バトルに役立たないからって捨ててしまうなんて。そんなトレーナーの勝手な都合で、このケーシイはまたひとりぼっちになってしまったのだ。

ボールの中のケーシイはいつも以上に寂しそうに見えた。

「ねえ、君、ポケモン持っていないんだよね？」

出し抜けに聞かれた唐突な店長の言葉に、思わず「え？」と聞き返

してしまうところだったが、すんでのところで口を噤んで頷いた。

「それじゃあこのケーシィ、君がもらってくれないかな？」

「ええっ!？」

突然の提案に、今度こそわたしは驚きの声をあげた。

「見たところこのケーシィも君に懐いているようだし、そうしても
らえると助かるんだけど…」

そんなわけで、ケーシィのもらい手は無事に見つかった。
わたしは生まれてはじめて自分のポケモンをもった。

マサキのいえ

ゲームコーナーのバイトが休みの日、わたしはケーシイを連れてコガネの街や街の郊外にある自然公園を歩いた。

ボールから出たケーシイはわたしの後ろをふわふわと宙に浮かびながらついてくる。クリーム色のエイリアンのような身体が宙に浮いて漂っている姿は、はじめは異様な感じがするが、見慣れるとなかなか愛嬌があつて可愛い。ケーシイもボールのなかにいるよりも嬉しそうに見えた。

ケーシイをもらってから勉強したことだが、ポケモンには特性や性格以外にも、タイプというものがある。性格とは違い、タイプはそれぞれの種類で統一されているポケモンの属性のようなものだ。

例えば、空を飛ぶポケモンは『ひこうタイプ』、海や川に棲むポケモンは『みずタイプ』というように、この世界にはいろいろなタイプのポケモンが生息しているらしい。

ケーシイはエスパータイプのポケモンだ。エスパータイプは超能力パワーを使えるという。だからこんなふうに念力のように身体を浮かせてわたしの後をついてくることができるのだ。

ケーシイのおかげでわたしは寂しくなくなったが、問題はわたしの仕事中にケーシイがボールのなかでひとりぼっちになってしまうことだった。今までずっと寂しい思いをしてきた子だ。これからはできるだけそんな気持ちにはさせたくない。

聞くところによると、ポケモンは一人のトレーナーにつき6匹まで手持ちに入れることができるそうなので、ケーシイに仲間をつくつてあげることも可能である。しかし、ポケモンをゲットするためには野生のポケモンがいる草むらに入らなければならない。そして必

要に応じてポケモンを弱らせたり、麻痺や眠りなど、状態異常にしてからモンスターボールを投げないとゲットできないらしい。果たしてそんなことがわたしにできるのだろうか？

コガネシティの名所・ラジオ塔の前まで来ると、ケーシーが空中でくるくると回転し始めた。きつとラジオ塔の発する電波に反応したのだろう。

クスクス笑ってその姿を眺めていると、ラジオ塔の入口に一枚のポスターが貼られているのが目にとまった。

『ポケモン譲ります』

さつそくポスターに書かれていた住所を訪ねると、民家から出てきたのは茶色の髪をした陽気な青年だった。

「いやあゝ実はイーブイのタマゴがふえすぎてしもてなあ。わいだけじゃ手に負えなくなつてしもて困つてたんや。姉さんもろてくれるんやろ？ ホンマに？ 助かるわあ！ おーきに！ あ、申し遅れたけど、わいはマサキっちゅーもんや。このへんの奴らからはポケモンマニア呼ばれとる。どーぞよしなに！ そんなでな、さつそくやけどこいつが姉さんにもろてほしいイーブイや！ イーブイでは珍しい♀やで。可愛がつてやってな！ ホンマおーきに！」

マサキさんは怒涛のマシンガントークでたたみかけ、イーブイというポケモンの入ったボールをわたしに手渡すと通信システムのメンテナンスの件で忙しいとかせっかく実家に帰ってきてるのに云々と

何やら早口に言ってすぐに家のなかに戻っていった。

呆気にとられてしばらく呆然としてしまったが、いつまでもマサキさんの家の前に突っ立っていても仕方がないので、とりあえず自然公園に移動してボールからイーブイを出してあげた。

ポン！と軽い音を立ててモンスターボールから現れたイーブイは、茶色いふわふわした毛皮に包まれていた。ぬいぐるみのような、愛らしい容姿で、まるで大きな瞳がキラキラと輝いている。尻尾もふんわりと膨らんでいて、顔をうずめたらとても気持ちよさそうだった。ケーシイも可愛いと思うが、このイーブイはなんというか、万人受けしそうな可愛さだ。

「よろしくね、イーブイ」

抱っこしようと手を伸ばしたら、思いつきりそっぽを向かれた。見た目の愛らしさとは裏腹に、このイーブイはどうやら気難しい性格のようだった。

しぜんこうえん

マサキさんから譲り受けたイーブイはわたしの言うことを聞かず、隙あらば勝手に逃走を図るので仕方なくボールに戻した。本当はケーシイと同じようにボールの外に出して連れ歩きたかったが、断念せざるを得なかった。

これじゃあケーシイと遊ばせるのはいつになるやら…当分先の出来事になりそうだ。

ケーシイと一緒に花壇の前のベンチに腰掛け、日向ぼっこをしていると、ミニスカートの女の子に話しかけられた。

「ねえ、あたしとポケモンバトルしない？」

バトルはやったことがないので断ると、女の子はわたしの隣に座ってうとうとしているケーシイを見て残念そうに言った。

「そっかー。あなたのケーシイ、レポートしか覚えてなさそうだもんね。じゃあ、バトルができるようになったらあたしとポケモンバトルしてね！いつでも連絡待つてるから！」

そう言っただけギア（ケータイ電話のようなもの）の番号をメモして渡してくれたが、生憎わたしはポケギアを持っていないので連絡手段がない。

ミニスカートちゃんが去ったあとで、わたしは店長の言葉を思い出していた。

「レポートか…」

店長に教えてもらったのだが、このケーシィは『テレポート』という技を覚えているらしい。というか、むしろそれしか覚えていないらしい。ミニスカートちゃんに言われたとおりだった。

テレポートはその名のとおり、瞬間移動できる技だという。バトル以外で使うと、近くのポケモンセンターまでトレーナーを連れて一瞬で移動できるので、とても便利な技だと店長から聞いていた。ポケモンセンターとはポケモン専用の医療施設とでもいおうか、ケガをしたりバトルで疲れたポケモンの回復や治療をしてくれるところだ。ゲームコーナーの近くに建っているので毎日見慣れてはいたが、わたしは一度も行ったことがなかった。

もしかしたらいい機会かもしれない。せっかく便利に技を覚えているのだから、ちょっと使ってみよう。

わたしはケーシィの手を握り、ドキドキしながら技を命じた。

「ケーシィ、テレポート」

瞬間、身体がフツと軽くなり一瞬だけ宙に浮いたような、奇妙な浮遊感がした。しかしすぐにその感覚は消え去り、重量が戻ってきた。思わず瞑ってしまっていた目を開くと、目の前に袴姿の男の子が立っていて、酷く驚いたような顔でこちらを凝視していた。

キキヨウジム

辺りを見回して、どう考えても違うと本能が告げていたが、万が一のこともあるかもしれないと思い、一応尋ねてみた。

「ここってポケモンセンターですか？」

「えっ…ここはポケモンジムですけど。キキヨウジム」
「キキヨウ!?」

予想外の返答に慌てておじいさんから借りているタウンマップを取り出して確認する。

キキヨウ、キキヨウ……あつた！キキヨウシティ！

地図を見ると、何故かケーシーとわたしはコガネシティからずっと東にあるキキヨウシティという街にワープしてしまったらしい。最寄りのポケモンセンターまでレポートする技だったはずなのに、どうしてこうなったのか。

首を傾げていると、袴姿の男の子が納得したように言った。

「もしかして、あなた挑戦者ですか？さっきはいきなり現れたからびっくりしたけど…それなら話は早い。さっそくバトルしましょう！」

「えっ？バトルって…」

「おれはキキヨウジムのジムリーダー、ハヤト！ひこうタイプのエクスパート！いざ、尋常に勝負ッ！」

「えっ!?ちょ…えええ!?」

あれよあれよという間にポケモンバトルが始まってしまった。もうわけが分からない。

ハヤトと名乗った男の子がモンスターボールを投げると、中から鳥型のポケモンが颯爽と登場して、素早い動きでわたしとケーシイの周りを飛び回って翻弄した。

とっさにケーシイにテレポートを命じたが、テレポートはバトルではまったく役に立たなかった。そうこうしているうちにケーシイが鳥ポケモンの体当たりを受けてしまい、慌ててボールに戻す。するとその瞬間、ポケットに入れていたもう一つのボールが揺れたかと思うと、ポン！と音を立てた。

「イーブイ!？」

なんとイーブイが勝手にボールから出てきたのだ。すぐに鳥ポケモンの標的が変わり、イーブイ目掛けて突進してくる。

「よけて！イーブイ！」

しかしイーブイはわたしの命令を聞かず、ケーシイと同じように体当たりをまともにくらってしまった。そして続けざまに大きな翼で叩かれ、機嫌を損ねたのかまた勝手にボールに戻っていつてしまった。

こうしてわたしの初のポケモンバトルは散々な結果に終わったのだった。

キキョウジム？

「えっ、挑戦者じゃない！？」

「はい……」

涙目で事情を説明したら、袴姿の男の子、ハヤトくんがポケモンバトルの基礎やポケモンジムについて教えてくれることになった。

ハヤトくんの説明によると、ポケモンジムとは、ポケモントレーナーがバトルの実力を試す道場のような施設だという。

ポケモンリーグ協会から認可を受けたポケモンジムは、ジムリーダーと呼ばれる代表者によって管理されており、そのジムリーダーに勝利し、実力を認められたトレーナーには公認ジムバッジが授与される。そして各街のジムリーダーに勝利し、8つのバッジを集めきったトレーナーだけが、ポケモンバトルの最高峰といわれるポケモンリーグに挑戦できる資格を得るのだという。言うなれば、ポケモンジムとはポケモンバトルを極めるトレーナーにとっての登龍門というわけだ。

ハヤトくんもそんなジムリーダーの一人で、彼はキキョウシティのキキョウジムで、毎日のようにバトルを挑んでくるトレーナーたちを迎え撃ち互いに切磋琢磨しているのだ。そんなポケモンバトルの実力者に、バトルど素人のわたしがまともに闘えるわけがなかった。本当なら勝負を挑むことすらおこがましいのだが、どういうわけかケーシイのテレポートが原因で手合わせすることになってしまったのだった。

そういえば、コガネシティにもジムがあつたような気がする。ジムリーダーはどんな人なんだろうか。今まではまったく興味がなかったが、ハヤトくんの話を聞いて少し気になり始めた。

「ところで、さっきのイーブイは人からもらったポケモンですか？」
「はい。今日譲ってもらったばかりのポケモンで、まだ全然慣れてなくて…」

さっきのバトルでもわたしに懐いていなかったから言うことを聞いてくれなかったのかと思ったが、どうやらそうではないらしい。人からもらったポケモンはレベルが高いと新しいトレーナーの命令を無視してしまうことがあるのだという。

レベルというのは、ポケモンの強さを表す数値のようなものであり、一般的にこの数値が高いポケモンほどバトルに強いとされる。野生のポケモンを倒したり、トレーナーとのバトルに勝利したりすると経験値がもらえ、その経験値をためることでレベルが上がる。トレーナーたちはポケモンのレベルを上げるためにトレーニングをしてバトルの腕を磨いているのだ。

「今は命令を無視するかもしれないけど、あなたにトレーナーとして実力がつけば、自然に言うことを聞いてくれるようになると思います。ケーシイもテレポート以外の技を覚えたり進化すれば強くなるし、きっとあなたも強いトレーナーになれますよ！」
「そうでしょうか…」

わたしが強いトレーナーに…。そう言われてもいまいちピンとこない。

「手持ちのポケモンは全部で6匹まで持てるので、あとはもっとポケモンをゲットすることですね」

「ゲット、ですか」

「はい。おれはひこうタイプのジムリーダーだから、鳥ポケモンを育ててますけど、ふつうはいろいろなタイプをバランスよく育てるのが理想かな。ああ、でも、ひこうタイプはオススメですよ！」

それからはハヤトくんによる鳥ポケモンの魅力紹介コーナーになってしまった。翼のフォルムがどうのこうの肩にとまって毛繕いしてる姿が云々と、ひこうタイプのポケモンがいかに華麗で美しいかの話が永遠に続く。

「あ…す、すみませんすっかり話し込んでしまつて！こいつらは父さんからもらった大切なポケモンだから、つい熱くなってしまいましたが。ちなみにこのポツポはピジョンに、ピジョンはさらにもう一段階進化するんですよ。ピジョットっていう、すごく綺麗で大きな鳥ポケモンなんです」

ピジョットか。どんなポケモンなんだろう。

ぜひ見てみたいと思ったが、生憎ハヤトくんの手持ちにはいないらしい。

「ポツポをゲットして育てればいいですよ。ポツポならすぐ近くの31番道路にたくさんいるし……あ、そうだ！突然バトルを仕掛けてしまったお詫びに、これをどうぞ！」

差し出されたのは、中身の入っていない空のモンスターボール。

「野生のポケモンはゲットしたことがないんですよ？草むらからポケモンが飛び出してきたらこのボールを投げてみてください。ポツポなら比較的簡単に捕まえられると思いますよ」

そんなわけで、コガネシティに帰る前に31番道路へ寄り道することにした。

キキヨウシティ

「モンスターボール、ありがとうございました。頑張ってポツポをゲットしてみます」

いろいろお世話になったハヤトくんにお礼を言う。そのまますぐに出発しようと一度は背を向けたが、立ち去り際、もう一度ハヤトくんの方へ振り返った。

「もしもわたしが強いトレーナーになれば、その時はもう一度バトルしてくれますか」

ハヤトくんは一瞬目を見張ったが、すぐに「もちろん」と笑顔を返してくれた。

ジムの外に出ると、そこはキキヨウシティ。

昔の古い街並みを残したような家屋が建ち並んでおり、街の北側には古めかしい塔が街を見守るようにそびえ立っていた。タウンマップによると、あれは『マダツボミのとう』というらしい。

さて、31番道路までは歩いてすぐのようだが、その前に確かめておかないといけないことがある。

わたしはケーシィをボールから出した。ハヤトくんのポツポから体当たりを受けていたが、わたしがすぐにボールへ戻したためかダメージも少ないようだ。ボールから出て嬉しいのか長い尻尾をユラリと振っている。

そもそもわたしがこんなところに来てしまったのは、どう考えても

ケーシイのテレポートのせいである。テレポートは近くの街のポケモンセンターへ移動する技だと聞いていたが、それが何故キキョウシティのポケモンジムなどという突拍子のない場所にワープしてしまったのか。

だから、わたしはもう一度試してみる必要があるのだ。

街中を見回し、ポケモンセンターの屋根を見つけると、ケーシイにそこを指差して言った。

「ケーシイ、あつちにポケモンセンターが見えるよね？そこまでテレポート！」

フツと身体が軽くなる感覚。

次の瞬間、強い風を感じて身体がぐらりと揺れた。

「え………？」

何事かと目を開けて、その光景に絶句した。
わたしは空の上にいた。

スズのとう

あまりの高さに膝がガクガクと震えて思わずその場にしゃがみこんでしまった。

遙か眼下にミニチュア模型のような街並みが見えた。どうやらわたしがいる場所はものすごく高い塔の天辺らしかった。頭頂部が踊り場のようになっていて、やけに広いスペースがある。

一瞬ここはマダツボミの塔かと思ったが、すぐに違うことが分かった。

それほど遠くない距離にコガネのラジオ塔が見える。と、いうことは位置関係から考えてここは——強風に飛ばされないよう細心の注意をはらってタウンマップを取り出し、紙面の上の街を指でなぞる。ここはコガネの北にある街、エンジュシティで間違いない。エンジュには塔が二つあるが、片方の塔は火事で焼けてしまったとあるので、必然的にここはスズの塔ということになる。

キキウのポケモンセンターに行くはずだったのに、どうしてこんな標高nメートルもある塔の天辺にいるのか。

わたしは、隣でとぼけた顔をしているケーシーを見た。

「もしかしてあなたって方向音痴……？」

ケーシーはわたしの言葉を理解しているのかいないのか、くいつと首を傾げた。

疑問は確信へと変わる。

この子は方向音痴なんだ！——それも、重度の。

今さらながら、あの時コインとケーシーを交換したトレーナーがすぐにケーシーを返しにきた理由がわかったような気がしたが、わたしにとってはそんなことはどうでもいい問題だ。

今はここからどうやって下に降りるかを考えなくては。

高さに怯えながら知恵を振り絞っていたその時、ふいに今までに感じたことのないような風が吹いた。バサッバサッと羽音が聞こえて振り向くと、わたしの後ろに一羽の巨大な鳥ポケモンが舞い降りていた。

その翼は虹色に輝き、立派な嘴は威風堂々とした風格があつた。わたしはその神々しいまでの美しさにすっかり魅せられていた。鳥ポケモンはわたしの存在などまったく意に介さず、悠々と鎮座していた。

ハヤトくんの言葉を思い出す。

『ポップはピジョンに、ピジョンはさらにもう一段階進化するんですよ。ピジョットっていう、すごく綺麗で大きな鳥ポケモンなんです』

もしかしてこのポケモンがハヤトくんの言っていたピジョットなのだろうか。

なんとなく違うような気がしたが、わたしはハヤトくんからもらった空のモンスターボールを取り出した。

『ポケモンが飛び出してきたらこのボールを投げてみてください』

言われた通りにモンスターボールを投げる。

わたしの手から放たれたモンスターボールは放物線を描き、ピジョットのお腹のあたりにポンと当たると、一瞬にして巨大なピジョットの身体を飲み込んでいた。ボールはしばらく小刻みに揺れていたが、見守っているうちに動かなくなった。

動かなくなったモンスターボールをおっかなびつくり拾い上げる。

これは、ゲット成功とみていいのだろうか。

ボールの開閉スイッチを押すと、なかからピジヨットが飛び出してきた。ピジヨットはいきなりボールのなかに閉じ込められたというのに一切暴れることなくおとなしかった。

「あの……よろしくね？」

話しかけてみても鳴き声を上げることなかった。

どうやらこのピジヨットは威厳たつぷりの見た目とは裏腹に穏やかな性格らしかった。どこかのイーブイとは大違いだと思っっていると、それに抗議するようにポケットのボールがガタガタと揺れた。

スズねのこみち

背中にわたしを乗せ、ピジヨットは塔の頂上から滑空した。

わたしは振り落とされないう必死にしがみついていたが、ピジヨットは風の抵抗などまるでないかのように優しく飛んだので、不安は杞憂に終わった。

塔の下に着地したピジヨットの背から飛び下りると、そこは紅く色づいた紅葉が舞う小路だった。

「運んでくれてありがとう」

ピジヨットをボールに戻そうとして、思いとどまった。

こんなに大きく立派な翼を持つ鳥ポケモンを再びボールのなかに閉じ込めてしまったら可哀想な気がしたのだ。

「……………」

しばらく悩んだが、結局ピジヨットを逃がしてあげることにした。

ピジヨットは一瞬戸惑ったような様子を見せたが、すぐに美しい虹色の翼を広げ、エンジュの空に飛び去っていった。

わたしもゲットしたポケモンをすぐに逃がす無責任なトレーナーの仲間入りをしてしまったが、後悔はしていない。これでよかったのだ。あの虹色の翼は大空を舞うのにふさわしい。

幸い、ハヤトくんからもらったモンスターボールはまだ残っているので、ポケモンはまたこれから草むらにでも行ってゲットすればいい

い。それにポケモントレーナーになりたてのわたしにはポツポをゲットしてちゃんと一から育てるほうがいいと思った。

「ホウオウの気配を感じて来てみれば…。君はいつたいどうやってここへ入り込んだのかな？」

ピジョットを見送っているといきなり背後から声をかけられた。驚いて振り向くと、いつの間にかわたしのすぐ真後ろに紫色のマフラ―をまいた青年が立っていた。

「あなたは…？」

「僕はマツバ。千里眼を持つ修験者」

どうしよう。

電波かもしれないこの人。

マツバと名乗った青年は言い知れぬオーラを醸し出していた。本能がその危険な香りをいち早く察知したのか、わたしの足はマツバさんから逃れるように後退りした。

だが、マツバさんとはつきり目が合った瞬間、まるで蛇に睨まれた蛙のごとく一步も動けなくなってしまった。

「君に話がある。僕と一緒に来てくれるよね？」

わたしにできることはおとなしく頷くことだけだった。

エンジュシティ

マツバさんに連れてこられた場所は、先ほどの小路を塔と反対側に抜けた先にある、スズの塔の関所と呼ばれる場所だった。

出会う人は皆、頭をまるめ修行僧のような格好をしたお坊さんばかりで、彼らはマツバさんが通ると頭を下げ、黙って道を譲った。

そこを当然のように悠々と歩く彼——マツバさんとはいったい何者なのだろうか。お坊さんたちの態度やさっきの得体の知れない威圧感を見るに、ただ者ではないことは明らかだった。

「君、どこから来たの？この世界の人じゃないよね」

出し抜けにそう言われ、心臓が飛び出るかと思った。

スズの塔の関所の一室、畳と障子のある和室でわたしはマツバさんと向かい合って座っていた。

どうしてわかったのか。

にわかに信じられない思いでこれまでの経緯を簡単に説明しつつ尋ねてみると、返ってきたのはやはり電波っぽい返答だった。

「僕には千里眼があるからね。ある程度のことはわかるんだよ」

どんなリアクションを返せばいいか分からず固まっていると、マツバさんはそんなわたしに構わずに言葉を続けた。

「実は、君がここにくることはずいぶん前から感じ取っていた」

「そ、それじゃあ…元の世界に帰る方法をご存知なんですか!？」

「…残念ながらそれはわからない」

落胆するわたしには相変わらず構わず、彼は続ける。

「僕には見えるだけで、君を元いた場所に帰してあげることとはできない。でも、助言することはできる——例のものをここへ」

マツバさんが呼ぶと、部屋の外に控えていたお坊さんが一礼して入室してきた。

その手には何故か、リュックサックが抱えられていた。

「君はこの世界を旅する必要がある。そうすればきつと元の世界に戻るための手がかかりが見つかるだろう。これは僕からの餞別だ」

餞別と称して差し出されたのは、今しがたお坊さんが運んできたリュックサックだった。

マツバさんのマフラーと同じ紫色のそれには、オバケのようなキラクターがワンポイントに小さく刺繍されていて、なんだか可愛いと思った。

戸惑いながら受け取ったそれにはずしりと重量があった。中に何か重たいものが入っているらしい。とりあえず礼を言つと中を見るように促されたので、恐る恐るリュックを開いてみる。

なかから出てきたのは不思議な模様のある大きなタマゴだった。

「これはポケモンのタマゴだよ。元気なポケモンと一緒に連れ歩けばやがて中からポケモンが生まれるんだ。生まれたポケモンはきつと君の冒険の役に立つだろう」

冒険も何も、わたしはこれからコガネシティに帰るのだ。せつかく
餞別をくれたマツバさんには悪いが、わたしは旅に出る気はなかつた。
確かにカントーへはいつか行ってみようと思っていたが、ゲ
ムコーナーでの仕事もあるし、手がかりを探す旅に出るのはもつと
先のことになると思う。

餞別を受け取っておいてからそのことを言うのは気が引けてしまつて、
さてどう説明しようか悩んでいると、ポケットのボールが揺れてイー
ブイが飛び出してきた。

「あ、こら！また勝手に出てきて…！」

イーブイはトレーナーであるわたしの注意を無視し、ポケモンのタ
マゴの匂いをしばらくクンクンと嗅いでいたが、すぐに興味を失つた
のか、また勝手にボールに戻っていった。

マツバさんがその様子を見てクスリと笑った。なんだか決まりが悪
くて、わたしは顔が赤くなるのを感じた。

恥ずかしさを紛らわすために今度はボールからケーシイを出した。
ケーシイは初めて見るポケモンのタマゴが物珍しいのか、興味津々
にリュックの中をのぞき込んでいた。

「ところで、これから君はまたそのケーシイでテレポートするの
かい？」

「いえ、テレポートはしないで歩いて帰——」

瞬間、わたしの身体は例の浮遊感に包まれた。
最後まで言葉を言い切ることなく、わたしは、テレポートを命じら
れたと勘違いしたケーシイによってマツバさんの前から忽然と消え
去っていた。

「君の旅路に幸多からんことを」

わたしが消えた和室でマツバさんがそう呟いたが、もちろんわたしの耳に届くことはなかった。

セキエイこうげん

重力が戻り、目を開けると、そこはもうわたしの知らない場所だった。

もちろんマツバさんもない。

わたしのそばにはまたしてもやらかしてくれたケーシィと、そしてマツバさんからもらったポケモンのタマゴだけがあった。

ここはどこだろう。

リュックを背負いながら辺りを見回す。

「大理石の床に…レッドカーペット……」

ハリウツドのスターが歩くような深紅の絨毯が部屋の奥へと続く。その横にはまるで訪問者を威圧するように黄金のポケモン像が並んでいた。

両側の壁、ヨーロッパ調の支柱の間にはそれぞれ巨大な振り子のオブジェがはめ込まれていて、そのふたつがシンメトリーになるようにゆっくりと重々しく揺れていた。

この場所を言葉で言い表すならば。まるで。

「——玉座」

隣のケーシィが心配そうにわたしの顔を見上げている。

「大丈夫だよ」の意味を込めてケーシィの頭をなでると、わたしは決意を固めた。

おそろおそろレッドカーペットの上を進んでいくと、部屋の奥に一人の青年がいることに気がついた。

赤い髪で、いまだき珍しくマントを羽織っていた。

わたしと目が合ったマントの青年は微かに笑った気がした。

「あの…ここはポケモンセンターですか？」

念のために聞いてみたが、絶対違うんだろうなということとはわかりきっていた。

しかしそれでもわたしはわずかなのぞみをかけて訊ねずにはいられなかった。

マントの青年は一瞬、何を言ってるんだこいつは的な顔したが、すぐに正しい現在地を教えてくれた。

「ここはセキエイ高原だよ」

「セキエイ…」

タウンマップで確認して、思わずその場にへたり込んだ。セキエイ高原はジョウト地方とカントー地方のちょうど中間地点に位置していたのだ。コガネシティに帰るつもりだったのにまたしても遠ざかってしまった。これならカントー地方の街の方がまだ近いところにある。

「ポケモンセンターに行くつもりなのかい？」

「まあ、そのつもりだったんですけど…」

苦笑いをしつつ答えると、マントの青年は何故か不敵な笑みを浮かべた。

「それはできないよ」

「へ？」

「ポケモンリーグは待ったなしの勝ち抜き戦。俺に勝つか負けるかしないと、この部屋からは出られない」

なんだか、とてつもなく嫌な予感がするのは気のせいだと思いたい。

「四天王を破り、このチャンピオンの間まで勝ち進んだ君ならば、もうとつくに覚悟はできているはずだろう？」

「えっ…ちょ…」

「最強のトレーナーとして、リーグチャンピオンとして。ドラゴン使いのワタル…いざ参る！」

ワタルと名乗ったマントの青年がボールからポケモンを繰り出した。現れたのは、巨大なドラゴン。

ドラゴンから放たれるプレッシャーに、わたしもケーシィも喉元に刃を突きつけられたかのように動けなくなった。レベルが、違いすぎる。

「それとも、尻尾を巻いて帰るかい？」

そんなの、帰りたいに決まってる。

帰れるものなら今すぐに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2225z/>

Role Playing Girl!!

2012年1月4日04時48分発行